

# 月見（十五夜と十三夜）

## 1. 大和の月見行事

旧暦8月15日の十五夜の月見には、団子を15個作り、ススキ、オミナエシ、ワレモコウなどの花、その年に収穫した大豆で作った豆腐、里芋、サツマイモ、柿、栗などとともに縁側に出した文机ふづくえに供えました。この夜、子どもたちがお供え物を盗みに来ましたが、叱らずに取らせていました。また月見の晩に夫婦のうち1人が外出すると、お供え物を残しておいてあとで食べさせました。お月見が終わったあとは、ススキなどの花はひとまとめにして屋根の上に放り投げおき、豆腐は翌朝の味噌汁に入れて食べました。十五夜をしたら片見月はいけないといい、旧暦9月13日の十三夜も同様の行事を行いました。その際、団子の数は13個にしました。



十五夜団子飾り展示（上）

ススキ（右上段）

オミナエシ（右中段）

ワレモコウ（右下段）

## 2. 芋名月・豆名月

月見の日を、お供え物にちなんで「芋名月」や「豆名月」などとも呼びます。芋は里芋、豆は大豆のことで、どちらも旬の作物です。現在の伝承では、十五夜のことを東北地方北部では「豆名月」、東北地方南部から九州にかけて広く「芋名月」とも呼んでいます。これに対して、十三夜を東北地方北部では「芋名月」、他の地方では「栗名月」とも呼んでいます。呼称が芋や豆に特化しているのは、十五夜が芋や豆の収穫祭としての性格をもつからです。

### 3. 供物盗み

十五夜や十三夜に、子どもたちが家々を回ってお供え物を盗む風習が、かつては全国的に行われていました。家の人たちは子どもが取りに来ることを承知していて、むしろ取られると縁起がよいなどといったり、畑の作物を取ってもよいとした地域もありました。供物盗みは子どもたちにとっては楽しみのひとつでしたが、教育上好ましくないという理由で、昭和初期あるいは戦後に止めさせられた場合が多かったようです。



十五夜の供物盗み（再現）

お供え物のまんじゅうを  
竹竿で突いているところ

### 4. 片月見

十五夜と十三夜のどちらかだけの月見をすることを「片月見」や「片見月」などと呼びます。関東地方の多くの地域では片月見を嫌い、十五夜に月見をしたら十三夜にも月見をしなければならないといわれます。十五夜によそで月見をした者は十三夜にも同じ場所へ行って月見をするものとか、十三夜に不在の人があると陰膳（かげぜん旅行などで不在の家族のために供える食膳）を据えるという地方があります。また夫婦の一方がよそへ行って別々に月見をすることを片月見（わざわい）といって禍が来るといいう地域もあります。